

大通公園を望む窓辺から

医師会卓球大会

副会長 ^{すずき}鈴木 ^{のぶかず}伸和

医師会の福利厚生事業は地域の医療機関が互いに顔の見える関係を構築する上でとても大切な役割を担っており、各々の地域医師会はそれぞれ魅力溢れる独自の事業を展開されていることと思います。私が所属する札幌市医師会手稲区支部ではその一環として随分前から卓球大会が開催されてきました。参加対象者は医師と医療機関の従業員そしてその家族で、参加者は各々ダブルスを組んでそれぞれの腕前に応じて自己申告制でAクラスからDクラスまで4クラスに分かれて試合を行います。

新型コロナウイルス感染症の影響でしばらく中止となっていたこの大会がこの度4年ぶりに開催されました。200人を超える参加者があったコロナ前までとはいきませんでしたが、それでも9医療機関から150人以上が参加する活気溢れる大会となりました。この大会の良さは何といってもランク別の大会のためラケットに球が当たりさえすれば誰でも参加できるということ。大会終了後は各々懇親会も開催されており、お祭りムード満載の大会となっています。とはいえ私は学生時代卓球部に所属しており、同じ手稲区支部には当時ラケットを交えた手稲溪仁会病院の古田先生や道立子ども総合医療・療育センターの浜田先生もおられ、この先生方と対戦するときだけは昔を思い出して真剣勝負です。

それにしても学生時代に取り組んでいた競技を、還暦を過ぎた今もこうやって楽しめるのは実に喜ばしい限りです。競技がダブルスだけでシングルスほど体を動かさなくていいというのも幸いしているのかもしれませんが。過去この大会には80歳を過ぎてもAクラスで参加されていた先生がいらっしゃいました。さすがに私はそこまで参加できる自信はありませんが、それでも今年の卓球の出来をみるとまだしばらくはこの大会を楽しめそうな気がしています。



野良サイン

理事 ^{こにし}小西 ^{ひろあき}宏明

野良サインをご存じでしょうか。駅員さんが手作りした案内標識のことです。

例えばJRと地下鉄の乗り場を間違えやすい場所とか、右側通行をお願いするとか、改札口までの徒歩時間を示すとか、いろいろあります。

そもそもこのような標示を大学の卒業研究とされた“ちかく”さんという方が野良サインと名付けられ、その後も収集？を続けられています。

実際に駅を利用すると野良サインは目に飛び込みやすく、オフィシャルなものよりもついつい見てしまいます。

何故でしょうか。文字の書体、大きさ、色使いも様々でワープロ作成であれば手書きもあり、全く統一されていないにもかかわらず、デザインに一貫性のある標識よりも印象に残ります。

実は我々は見慣れたものや整理整頓されたものは目に見えていても内容を認識しにくくなります。これを「ゲシュタルトの法則」と言います。

人間の脳が視界に入ってくるものをひとつずつ認識するのではなく、全体のまとまりで見てしまうのです。公式看板を見慣れてくるとそれは景色のひとつになってしまい、個々の表示内容の認知に至りません。

そこに手書きの汚い？文字で大きく掲示物があると、しっかり見られるわけです。

似たような現象は我々の外来診療の場でも起こっています。診察室で説明された内容はお会計の際には約半分忘れられています。もし「塩分控えめに」とか「散歩しましょう」とか毎回同じような内容を話していると、ゲシュタルトの法則により病院を出る頃には忘却の彼方かもしれません。

患者さんに少しでも響くようにするためには、その患者さんにしか伝わらない言葉掛けが大切だと思います。「お正月はお孫さん戻ってきたの。美味しいもの食べ過ぎてない？」医師の“野良言葉”ならきっと覚えてくれると思います。